

其の六

ふるさと御所 歴史探訪

おかげ参り〈6〉

これまで、市指定文化財になっている文政13年（1830）のおかげ参り文書について書いてきました。最後に、江戸時代の常識には問題が多いことについて考えてみたいと思います。

この年のおかげ参りのときには、400万人〜500万人が参宮したとされ、これが常識になっています。左記の歴史辞典類は、全てこの人数を採用しています。

(1)『国史大辞典』（吉川弘文館）
「8月末までに約500万人に達した」（市立図書館所蔵）

(2)『日本歴史大事典』（小学館）

「462万人に達する大規模なものになった」

(3)『日本史大事典』（平凡社）

「閏3月から6月20日までに宮川の渡しを渡った人数は427万6500人であった」

伊勢に入

るためには、宮川を渡し船で渡らなければなりません。「上の渡し」と「下の渡し」の2ヶ所の渡しがありました。

写真1は『伊勢参宮名所図会』に描かれている宮川の渡しで、写真2は下の渡し付近の現在の様子です。

『文政神異記』という本に、渡しを渡った人数が書かれています。6月20日までの日々の人数（前記(3)で採用）と9月までの合計の人数（(2)で採用）です。

1日の最大の人数は、下の渡しの12万人ですが、この人数を渡すために何分で往復しなければならぬかを計算してみました。30人乗りの舟を30艘用意し、24時間航行したとして、往復10分あまりという結果です。この時間では無理ですし、これ以上



写真2 現在の宮川



写真1 伊勢参宮名所図会

舟を増やすこともできないでしょう。記録の12万人は片道とされてきましたが、これを往復の人数と仮定しますと、参宮者数は、一挙に半分になってしまいます。しかし、それでも多いように思います。

参宮者数が通説より少なかったとしても、全体の規模が小さかったというわけではありません。何らかの形で関わりを持った人は、想像以上に多いのです。御所町では、宿泊の世話や寄付、立山の制作や見物等に大勢の人たちが関係しています。このような施行所が多数設けられたことが、各地の市町村史等に書かれています。

おかげ灯籠の建設ということもあります。おかげ灯籠は、文政13年と翌天保2年（1831）に建てられた太神宮の灯籠です。奈良県内に約150基の灯籠があり、参宮する代わりに、建てたと考えられます。御所市内にある9基を表にまとめました。

伊勢に行く代わり

表 御所市内のおかげ灯籠

場所（50音順）	建設年月	笠幅	基壇幅	高さ	備考
井戸 高木神社	天保2年3月	69	90	219	
稲宿 御霊神社鳥居前	天保2年4月	66	71	196	
多田	平成15年7月再建	61	121	262	天保2年3月
大口峠	おかげとし	64	67	-	火袋なし
古瀬 大倉姫神社	天保2年8月	76	98	231	
下茶屋 下茶屋橋西	文政13年	66	150	-	火袋なし
鳥井戸 妙相寺境内	天保2年〔春〕	66	-	167	基壇なし
室	天保2年9月	97	170	348	
柳原 西応寺前	文政13年5月	80	177	306	

※「笠幅」「基壇幅」「高さ」の単位：cm

に近くの神社に参詣したという事例があります。また、畠田村（現在の北葛城郡王寺町畠田）に臨時の社が建てられ、大勢の参詣者があったということです。

前記の他、伊勢に関連する芝居が上演され、また、おかげ参りに関する多数の出版物が発行されたということです。今まで、おかげ参りは、参宮者の多さのみが注目されてきましたが、いろいろな側面を持っています。

今回は、辞典類に書かれていることでも、疑問があることを述べました。歴史は、残っている文書等によって、「昔はどうであったか」等を考えます。しかし、そこに書かれていることが、正確に事実を伝えているかどうかはわかりません。したがって、別の角度から検討を加える必要があると思います。次回以降、江戸時代について、私なりの考えを書くことにしたいと思います。

（文責 中井陽二）